

受賞者氏名	鎌田 智光	
所属	デザイン工学部 建築学科	
受賞年月日	2026 年 7 月 1 日	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	住総研	
受賞名	2025 年度 第 11 回 住総研 博士論文賞	
受賞(研究)内容詳細	人生 100 年時代を迎え、健康寿命の延伸は個人の生活の質向上にとどまらず、医療・介護費の抑制や労働生産性の維持といった観点からも、持続可能な社会の実現のための基盤的課題と位置づけられる。近年では、健康の維持・増進には生活習慣の改善といった個人の自助努力だけでなく、個人を取り巻く環境の整備を含む包括的アプローチが不可欠であるという認識が確立しつつある。 中でも、人々が生涯にわたり最も多くの時間を過ごす住宅の衛生、温熱、音、光などの要素の質は、居住者の健康と密接に関連する要因として注目されている。しかし、住環境と健康の関係を扱った既往研究の多くは、横断分析や転居・改修の前後比較といった短期的視点にとどまり、両者の長期的関係を追跡した研究は限られていた。そのため、“質の高い住環境で生活し続けることが健康維持に寄与するのか”、あるいは“環境変化への適応力を低下させ、逆に健康被害を誘発してしまうのか”といった相反する仮説に対する科学的根拠は、依然として不十分であった。 本研究は、こうした知見の空白を補うべく、日本全国の 15,000 名を対象とした 10 年間の追跡調査で得られたパネルデータをもとに、生存時間解析を通じて住環境と健康の長期的関係の検証を試みたものである。 分析では、居住者の年齢や性別といった個人属性に加え、食事、運動などの生活習慣や既往歴といった項目も考慮し、実生活に即した個別最適な知見の蓄積を目指した。さらに、本論文では研究成果の社会実装を見据えた派生的取り組みも展開している。その一つとして、項目反応理論を用いた住環境評価指標の再構築が挙げられる。これは、各環境要素の寄与度を統計的に算出し、住環境の質を簡便且つ高精度に把握する新たな評価アプローチとして意義を有する。また、住環境による健康影響をマクロ経済的価値に換算するシミュレーションモデルも開発し、住宅・医療・政策分野の多様な関係者に対して、住環境整備の重要性を可視化している。 総じて本研究は、健康寿命延伸に資する今後の住環境の在り方を検討するうえで一定の科学的根拠を提示するとともに、住環境の適切な整備を後押しすることを目指したものである。本研究を出発点として、より長期的且つ精緻な研究開発へと発展し、学術および実務の双方における深化に寄与することが期待される。 【参考 URL】 https://www.jusoken.or.jp/kenshou/paper.html#cat355	